

恋愛レギュラリゼーション

RedTailCat-G

／

as_capabl

※この作品に登場する女性キャラクターは、
すべて機械知性です。

1

校舎は夕焼けに染まり、居残っていた生徒たちも、一人また一人と家路に就く。

文化祭を近く控え、校舎から立ち上る熱気はひとときわだった。

一生で一度しかない、高校生活という機会をめいっぱい楽しんでやろうという想いが、何も言わずともそこから感じられる。少なくともこの国には、このように学生が酔狂に身を浸す伝統がある。国や時代が変われば学生というもののあり方は違う。普遍性を持った物ではまったくない。それでも、ここには引き継がれている。

学校というものの形態、そのものが変わっても。

この校舎は、二〇世紀末から二一世紀初頭の一般的な公立高校をモデルとしている。が、それと同一の存在ではない。余りにも隔たっている。

現実そのものに見える景色だが、目を遠くに遣ればローポリゴンな広告バルーンが空に投影され、周囲の建造物はどこどこに意匠として、現実には存在しえない曲面構造が見られる。遠くの物体は、演算速度のために描画を省略されている事が、視力のいい人間ならかろうじて見て取れるだろう。

この風景は、全てが仮想現実、VR空間の中にある。生身の人間である彼は、全身を覆う非接触デバイスを使って、この風景を認識している。下校していく生徒たちも、半分は彼と同じだ。物理的な肉体はこことは違う世界にあって、みな画一的に無機質な装置を接点として、この世界に身を浸している。

彼が佇む体育館裏は、普段から立ち入る生徒もないが、今は等しくオレンジの陽光に塗りつぶされ、夜の帳の下りる前、一瞬だけの佇まいを見せている。

彼こと、円藤弘樹は、本来こんなに遅くまで学校に残っている種類の人間ではない。この時間、この場所に来るように、とある人間から指示を受けただけだ。果たして、そこに

はもう一人、女子生徒がいた。

腰まで伸びる、たつぷりとした黒髪に、色白で端正な顔立ち。やや小柄で控えめな物腰ながら、出るところはしっかりと出た体つき。

決して派手ではないが、文句の付けようのない美人。このシチュエーションで彼女から何らかの——例えば男女の関わりを求めるような——お願いをされたとして、断る男は恐らくないだろう。

果たして、彼女の瑞々しい唇が動き、言葉を紡いだ。

「あなたの演算資源を、私に預けて欲しいの」

彼女の頬が、夕日に染まって心なしか紅く見える。あるいは本当に頬が染まっているのか。あるいはそうかもしれない。口にした事の重大さを鑑みれば。

男性が持つ演算資源を、女性たる機械知性に預ける事。それはすなわち、その女を生涯の伴侶とする事を意味するのだ。

この仮想空間の、もう半分を占める存在。それは、人間が蛋白質の脳できるように、電子的に築かれた演算資源の上で擬人格演算を行い、泣き、笑い、会話をする、機械知性である。

演算資源とは二〇世紀から存在する概念で、電子機械が何らかの数学的問題を計算する能力を、便宜的に数値化したものだ。遙か以前から、人々は演算資源を消費して様々なネットワークやシステムを稼働させてきた訳だが、仮想現実の時代において、演算資源にはさらなる意味が後付けされている。

この空間に、生身の人間の女性はいない。

この世界、正確に言うところのサーバーには、生物種ホモサピエンスとして生まれた、という意味での女性はいない。ほとんどの女性は「擬人格」といわれる、コンピューターで再現された知性なのである。

彼女たちの思考の地盤となる学習エンジン「ビット・ラヴァー」は開かれたシステムで、ユーザーは自分の持つ演算資源を自由に追加することができる。

男は女たちに演算資源を提供する。

女はそれに応える。

そうして回っているのが、この世界なのだ。

であるから、弘樹は言葉に詰まりながらも意図を確かめる。

「それって……」

「ごつ誤解、たぶん、それは……」

「うん。何となく、分かるよ」

高校生にとって、そのような人生を左右する判断はまだ早い。弘樹と彼女はつい先ほど、放課後の課外活動の最中に出会ったばかりだ。それに普通は、この歳で機械知性を養えるほどの演算資源を持っていない。弘樹は数少ない例外である。

やれやれ、と弘樹は肩を落とした。耳まで赤くなつた彼女を見下ろして途方に暮れる。弘樹と、そして彼女も間違いなく、同じ人物に呼び出された。

「首謀者」の性格と、昼間の思わせぶりな態度を考えれば、これは十分可能な展開だった。頭の中で、少し時間を遡る。



「弘樹君、遅刻ー」

「まだ時間前だろ」

「生徒会役員は、言われなくても早く来て準備するの」

「生徒会『雑用』係にも適用されるのか、それ」

肩の辺りで切り揃えた栗色の髪、大きな瞳の小動物めいた幼馴染が、ドアをくぐるなり甲高い声を投げ掛ける。弘樹はそれを涼しい顔で受け流す。

職員室を除くと学校で最大の床面積を誇る、第一会議室。時間より早く来て、座っている参加者は多く、席は既に半分ほど埋まっていた。校内の各委員が一同に会した、文化祭の準備報告会である。参加者は主に高校二年生。参加者ごとに、大なり小なり思う所があるようで、熱気が伝わってくる。

あまりこういった行事に熱心とは言い難い弘樹としては、ここで会議室に入っていくと視線が集まって辛い物があった。幼馴染こと風井琴子が明るい声を掛けるのは、そういった居心地の悪さに対するフォローの面もあると分かった。

「弘樹はそこ、座って」

会議室には、長机が長方形に並べられていた。全員が向かい合って話す円卓方式だ。黒板の真ん前の三席が正副会長と、議事録担当の書記その一。琴子は板書担当の第二書記で、左前端を確保しているようだ。弘樹の席として示されたのはその隣、ではなく、その隣の席は埋まっているので、二つ隣の席だった。

そして、その間の席に座っていたのが、長い黒髪的女子生徒。こういった場で目立つキャラクターではないな、というのが第一印象だった。

「隣、いいかな」

狭い学校だから、その顔を目にする機会は今までもあったと思われるが、面識はない。わざわざそんな席を薦める琴子の意図に釈然としないながらも、念のために一声掛ける弘樹だったが、彼女は思いの外はつきりと顔を上げて微笑んできた。

「逢河^{おうかわ}希^{ぞみ}です。よろしくね、弘樹君」

面識のない生徒に名前を知られている事に少し面食らいながらも、状況を察する。

「ひょっとして、琴子の友達なのか？」

「うん。四月に一緒のクラスになってからだから、弘樹君の方が付き合いは長いと思うけど」

クラス替えから二か月。社交的な琴子の事だから、幼馴染の弘樹の知らない友人が来ていても不思議はない。

「友達じゃなくて、親友ね」

琴子が横から口を挟んでくる。出会って二ヶ月の人間を親友と言って憚らないのも、また彼女らしい。

「はい、それでは会議を始めます」

生徒会長が両手を上げ、宣言する。

まずは文化祭が一ヶ月後に迫った事の確認。学校公式サイト掲載締切のアナウンス。

そして各委員からの連絡。

三番目に、隣の席の逢河希が挙手して発表した。

「ボランティア委員からの連絡、イベント中の防犯についてです。この学校の文化祭は、生徒の自主性を最大限尊重する方針です。リージョン内でも有名になるほどの盛り上がりは、そのお陰でもあるのですが、反面危険もあります。特に最近、妙な思想団体の勧誘や、無断の宣伝行為といった事案が、まだ準備中にもかかわらず寄せられています。そういった事案は、ボランティア委員の担当になりますので、少しの事でも遠慮せず、お近くの委員までご連絡下さい」

連絡のみで着席し、次の委員に出番をつなぐ。つつがなく会議は終了するが、弘樹個人には引っかけがあった。

会議が終わったあと弘樹は聞いてみた。

「妙な思想団体とか、そんなのまで気にしないといけないのか？」

「普通の文化祭なら大丈夫だったんだろうけど、今や町一つ丸ごとのお祭りだから、色々

紛れ込むようになったみたい」

普通、高校というのは門と塀に囲まれて部外者は入れないから、もちろん校内で変な人間を見掛けるような事はない。しかし、文化祭は町まるごとを生徒たちの活動の場にする数少ない機会だ。

高校生ごときが町まるごとを文化祭のために使えるというのも仮想空間ならではの、基本的にこのリージョンは学生とその関係者、あとは地価の安さを狙った中小企業が居を構えている程度の、のどかな風景が広がっている。故に土地は使い放題、とまでは言わないが、文化祭ともなれば、町のあちこちに櫓やステージがこしらえられ、文化祭当日を待たずとも高校生が歌や踊りを披露して、何処かのサイトの閲覧数を稼いでいるという自由なありさまになる。

自由には危険がつきものという事で、やはり妙な人物が紛れ込んだというトラブルの噂は風の噂で耳にする。変な男に声を掛けられた、個人情報を取られかけた、といったありがちなものから、自殺したはずの人間のアカウントがゾンビになって踊っていたとか、人の顔のテクスチャを張った犬が出たとかいった、都市伝説まがいの物まであった。

少なくともいくらかは、生徒たちに実際に迫る危険である。それでも大人が動かないのは、彼ら自身がこの急速な世界の仮想化に付いていけないせいだ。教師はただでさえ

頭数を減らされて手が回らない。ならば警察という話になるが、仮想空間における警察の活動は「証拠のログがないと動かない」が鉄則になってしまっている。

しかし、逆に言うとログさえあれば大抵の問題は解決できるという事で、自力で証拠を掴んで警察機構に持つていくという方法があり、これが上手くシステムとして根付いてしまった。公平性とか自力救済の是非とかの細々した問題はどうかあれ、腰が重い癖に何かあれば騒ぎをやたらと大きくしたがる、いわゆる大人という連中の干渉を排除できるのは、暴れたい盛りの中高生にとって理想的な世界であった。

「こうして学校が仮想現実にも丸々収まってしまっただけから、どれくらいになるか知ってる？」
逢河希は不意にそのような問いをぶつけた。

「三〇年くらい、だったかな」

「移行が始まって三〇年。完全にこうなつてからの期間はもっと短いわ」

希が語り始めた。

まずは物理世界の学校に、仮想現実層が導入された。その時の名目は『学校に通えない子供の通学手段』だった。ところがこれを、足の怪我で一時的に通学できない生徒も使いたい、過疎地で一時間のバス通学を強いられている生徒も使いたい、登校拒否になった生徒も使いたい、と適用拡大されていき、ついには普通の生徒まで使用できるようになった。

折からの教育予算削減も手伝って、急ピッチで物理的な校舎が廃止されて、すべての学校が、純仮想的な存在になってしまった。

障害者支援、子供の保護といった反論しづらいお題目に、他の人間の実利が噛み合った場合、世の中というのは想像以上の勢いで変わる。

一方で、急激すぎる変化は歪みも生む。

「妙な思想団体っていうのも、そういう世の中の変化に付いていけない人たちの不満のけ口、という面が大きい。注意してないと分からないかもしれないけど、最近その手の事件がとつても多い」

言われてみれば、団体がどうかというニュースを耳にする事が増えた。

「なるほど。で、ボランティア委員として、それに危機感を覚えてる、と」

「ボランティア委員の元々の役目は、校外活動を円滑に進めるための事務処理。だったんだけど、見回りやちよつとした『揉め事の解決』も、ここ十年くらいは私たちの責任でやっている。私の代で問題を出したら、先輩たちに顔向け出来ないからね……とはいえ、やっぱり高校生の身空だと、色々厳しい所もあって。その、演算資源とか……」

「確かに、犯罪のログを抜くとなれば、演算資源があればあるだけ欲しい所だな」

そこで希が、ほんの少しだけ周囲に目をやった事に弘樹は気付いた。

会合は終わったが、まだ少し生徒が残って話をしている。彼女は人目を気にしているようだった。

「ここから先は、場所を変えようか」

狙っていたかのように、琴子が割って入った。

「何だよ急に」

抗議するも意に介さず、琴子は一方的に時間と場所を指定した。

こうして、『体育館裏で告白される』という素敵なシチュエーションが完成した。

ちなみに、琴子は校舎の陰からその光景をニヤニヤ顔で観察していたが、一瞬後には二人に取り押さえられた。

「愛の告白の現場って、一回は横から見てみたいと思わない？」

「全くそう思わないんだが、それはどこの人々の共通認識だ？」

「えー。罰ゲーム告白って、定番じゃん」

「高校生の間では定番じゃないな。小学生ならまだしも」

「どう？ 希って結構可愛いし、ちよっと舞い上がっちゃったりしなかった？」

悪びれない幼馴染みに弘樹はかぶりを振って、状況のまとめを始めた。

「希は、文化祭の円滑な進行のために、普通より多くの演算資源が必要になり、それを友人である琴子に相談した。普段から俺の演算資源をガメていて余裕のある琴子は、それを一時的に希に預ける事に決めた。対価である小学生めいた罰ゲームを兼ねて、本来の演算資源の所有者である俺に了承を取る場として、この会合をセッティングした。これでいいな」「異議あり。ガメてる、っていうのは人間きが悪いと思います。あと、私と希は友人じゃなくて、親友です」

「ガメる、以外に適切な言葉がないだろ、この場合」

本来、一介の高校生がそれほど多くの演算資源を所有している事例は少ない。女子たちも、別に必ずしも男性から演算資源を貸与される必要はない。公共の演算資源だけでも、擬人格は十分に生存できるのだ。必要より多くの演算資源を持っていて良いことというのは、身体能力や所有物等にちよつとしたボーナスが付くという程度である。

弘樹が所有している演算資源は、元々は親戚から貰い受けた型落ちのコンピュータである。機械弄りが好きだった幼い弘樹は、これを三日三晩弄り回し、大人たちが思った以上の演算能力を引き出したのである。それ以来、弘樹はことあるごとに計算機を入手してきてはレストアし、気づいたら高校生に分不相応な演算資源を所有するに至ったのだ。

一方で、弘樹は作り出した演算資源それ自体には興味がなかった。とりあえず隣家の琴子に自慢してみたところ、琴子が欲しいと言い出したので、預ける事にしたのだ。なお、演算資源が男女間で特別な意味を持つという事を弘樹が初めて知ったのは、それよりずっと後の事であった。

琴子は最初から、その意味について知っていたのか。あるいは、弘樹同様に何も知らず演算資源を欲しただけだったのか。今もってその真意を弘樹は知らない。

「二人ってやつぱり、かなり仲良いよね。学年でも噂のカップル……」

「さて、演算資源を割り振ろう。そしたら今日はもう帰るか」
強引に話を打ち切る弘樹だった。

目をつぶって、少しでも意識を集中してやると、網膜にいくつかのパネルが浮かび上がる。物理世界を忠実に模倣した仮想空間だが、こういった電子的インターフェースにも最低限アクセスできるようになっている。ここから所持品を選択したり、ログアウトしたりといった事が可能だ。

「演算資源管理」のメニューを選択し、琴子に一〇〇パーセント振っていた数値を五〇に減らす。それから、最近会話をした人物リストより希を選択、演算資源の付与対象に追加。

初期値で残資源の五〇ポイントが振られるので、それをそのまま確定した。

簡単な操作である。このメニューは擬人格も使用可能だ。ログアウトボタンが無い事を除いて。

弘樹だって、この世界では一介の電子データでしかない。物理世界に基盤を持つ自分と、ビット・ラヴァーに基盤を持つ擬人格たち。その違いはほとんどないのだ。

ビット・ラヴァーは、チューリングテストに関係する問題への解として提示されたアルゴリズムの実装である。

チューリングテスト。人工知性とは何か、何をもってある機械が知性を持つといえるのか、という問いに対して、アラン・チューリング博士が思考実験として提示したテストである。当初は純粹な思考実験であったチューリングテストだが、技術の進歩に伴って実際に行われるようになり、テストをパスする機械知性も、西暦二千と十年代になってちらほらと現れ始めた。しかしながら、チューリングテストに合格した所で、それが即座に何かの役に立つ訳でもなかった。まだ機械知性が社会に組み込まれるのは未来の話であろう、と思った人類は、チューリングテストに条件を一つ付け加えた。こうして改変されたテストは、第二チューリングテストと呼ばれるようになった。

第二チューリングテスト。人間のテスターが、機械知性と対話を行い、テスターが人間と区別できなかった時、それを人格とみなす。ただし、テストに参加する機械知性の動作アルゴリズムはテスターに公開されており、かつ、機械知性が会話文生成に際してアクセス可能な情報ビット列の全ては、テスターからも原理的にアクセス可能であるものとする。

「会話文生成に際しアクセス可能な情報」という制約は、当初はその当時のトレンドであったビッグデータ解析の使用を制限する目的で置かれた。要するに、一見して自然な受け答え文であっても、それが単にインターネットから探して貼り付けたものである、という状況が多々あったので、これを制約したのである。しかしながらこの条件は次第に拡大解釈され、「コンピューターの知識を全てユーザーにもアクセス可能にする」という強い制約となった。「原理的にアクセス可能」という文脈に、例えばサーバー管理者に金品を積んで情報を入手する、といったような手段まで含む解釈が一般的となったのだ。

あるいはこれは、「秘密鍵以外の情報は全て公開情報（ホワイトボックス）と考えるべし」というセキュリティ理論の考え方にも似ていた。そのために、多くのプログラム開発者はこれを無条件に支持した。一方で、脳科学方面からもこれを支持する声があった。人間の脳は量子効果が一部効いているため、状態をビット列として解釈する事ができない。すな

わち、人間の脳は量子力学的な重ね合わせの状態にあり、系を破壊せずにこれを観測する事ができない。人間の脳自体には未解明な部分が多いものの、脳に入ってくる情報の内訳はおおよそ分かっている。もしも人間性を人間性たらしめるものが、単なるブラックボックス性に由来しているとすれば、道義的な問題はさておいて、人間を余さず分子レベルに分解して解析すれば人工知能が作れる事になる。それは直感に反する。

単なるブラックボックスより強い、原理的にアクセスができないという不可知性、還元不可能性。それは、人間が知性を知性と認知するために必要不可欠なものなのではないか。ビット列に還元できないという事は、情報の改竄ができない事、情報の複製が出来ない事も、同時に担保する。これによってスワンプマン問題などの、意識に関するいくらかの問題も同時に解決できる。実際、人間の脳はそれが量子デバイスであるとすれば、量子複製不可能定理によって原理的に複製が不可能なのだ。

第二チューリングテストに合格する人工知能が現れるのはかなり先であろう、という予想は、比較的早期に覆る事になる。ハンドルネーム「タイプトリー」を名乗る一人の人間が、ビット・ラヴァーシシステムを提唱したのだ。

男は演算資源を提供し、擬人格は女としてそれに応える。そのサイクルは、当時ちよう

ど普及期にあつた完全没入型VR（仮想現実）デバイスもあいまって、瞬く間に広まり、世の演算資源を吸い上げて雪だるま式に膨れ上がった。

擬人格たちの人権問題と、法的な扱い。代理出産の認可。そういった諸々を乗り越え、擬人格を母として育った最初の世代が、弘樹たちの世代なのである。